

# 元良勇次郎の修養論

## —その特徴と教員の修養への示唆—

鈴木 聡志\*†

(令和元年7月9日受付/令和2年3月10日受理)

**要約**：教員が絶えず研究と修養に努める義務が法令に定められているが、教員の修養とは何であろうか。本研究では明治時代の心理学者・元良勇次郎の修養論に注目し、その特徴と教員の修養に与える示唆を検討した。元良は1903年から亡くなる1912年までの間に23の修養に関する文章を発表した。彼は1907年から翌年にかけて心理学と生物学に基づいた体系的な修養理論を作り、人間は意志の活動による試行錯誤の方法により品性を修養することができることを主張した。彼の修養に関する文章の特徴は、時に非常に理論的なものがあることである。彼の修養理論は修養はいかにして可能かを説明するもので、教員と学生に修養のメカニズムを説くものと評価することができる。彼の理論は現代ではエピジェネティクスによって根拠づけられる可能性を秘めている。

**キーワード**：元良勇次郎, 修養, 教員の修養, 心理学史, エピジェネティクス

## はじめに

「修養」の語は現在では古いイメージがあり一般にはほとんど使われない。しかし教育基本法第9条に「法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない。」とあり、また教育公務員特例法第21条に「教育公務員は、その職責を遂行するために、絶えず研究と修養に努めなければならない。」とあるように、法令の中では死語ではない。したがって教員が励み努めるべき修養とは何なのかを、教員の養成や研修に携わる者は考えなければならないだろう。

「修養」という言葉は近代以前から日本にあったが、明治初期にスマイルズの『自助論』などの翻訳書で culture や cultivation の訳語として使われた。そして明治30年代中頃にこの語が流行し始め、修養団体が生まれたり、雑誌に「修養」欄が設けられたりした。そしてその後大正前期にかけて書名に「修養」を冠した書物「修養書」の刊行がブームとなった。新渡戸稲造の『修養』(1911)や加藤咄堂の『修養論』(1909)がその代表的な書物で当時のベストセラーだった<sup>1)</sup>。

ところで「修養」とは何を意味するのか。流行当時の説明のひとつに新渡戸によると「修身養心」「身と心の健全なる発達を図るのが其の目的である」<sup>2)</sup>がある。今日的な意味では、『大辞林』に「学問を修め精神をみがき、人格を高めるよう努力すること」<sup>3)</sup>とある。

本稿は、かつて日本で盛んだった修養論の中で心理学者・元良勇次郎のそれを取り上げて、その特徴と教員の修養に示唆するものを検討する。元良勇次郎(1858-1912)は

京都の同志社英学校で学んだあと上京し、東京英和学校(現在の青山学院大学)の設立に携わり、その後渡米してジョンズ・ホプキンス大学で心理学者ホールのもとで博士号を取得した。1888年に帰国し帝国大学(現在の東京大学)で精神物理学の講義を開始し、1890年から亡くなるまで同大学教授として研究と教育に携わった<sup>4)</sup>。主著に、『心理学』(1890)、『倫理学』(1893)、『心理学十回講義』(1897)、『論文集』(1909)、『心理学概論』(1915、没後刊行)がある。元良以前にも大学や学校で心理学を講義した教育者がいた。その意味で彼以前にも心理学者はいたが、元良は日本で最初の「自立した心理学研究者」<sup>5)</sup>だった。そして明治期の教育問題への発言も多い<sup>6)</sup>。1894年からは東京高等師範学校教授を兼務して、教員養成にも従事した。

これまでの修養研究では、新渡戸稲造<sup>7)</sup>、澤柳政太郎<sup>8)</sup>、加藤咄堂<sup>9)</sup>、天野藤男<sup>10)</sup>らの修養論が取り上げられているが、元良の場合、単行本としての「修養書」を著さなかったためか注目されることがなかった。

## 1. 資料と修養論の展開

本稿で資料とする元良の修養論は「修養」の語が題目中に含まれる14の文章(表1)と、雑誌の「修養」欄に掲載された11の文章(表2)の、重複するもの2編を除いた23の文章とする<sup>11)</sup>。ただしこれらには講演を元にした文章や、雑誌記者や編集者への談話が多く含まれるため、元良によって書かれたことや校閲されたことが明らかな文章を資料として重視する。引用は特に断りのない限り現代語に翻刻された『元良勇次郎著作集』からとする。表1中の14の文章を発表順に検討すると、元良の修養論は以下の3期に分けることができる。

\* 東京農業大学教職・学術情報課程

† Corresponding author (E-mail: suzukis@nodai.ac.jp)

表 1 題に「修養」の語が含まれる元良の文章

年	雑誌	番号	題目	備考
1903	愛国婦人 成功	1	女子修養論	女子修養会における演説。校閲なし。 文責は記者。
		2	青年と修養	
1904	丁酉倫理会倫理講演集	3	科学と修養	丁酉倫理会での講演。
1906	千葉教育雑誌  和融誌 六合雑誌 中学世界	4	精神修養に就きて	師範学校生徒への講演を校閲。『論文集』*に収録。 禅宗関係者への講演。 『モニスト』への寄稿の翻訳。
		5	西洋の思想と精神修養との関係	
		6	精神修養上宗教と科学の関係	
		7	如何にして精神を修養すべきか	
		8	国民品性の修養について	
1907	内外教育評論	8	国民品性の修養について	文責は記者。 師範学校長会での講演。『論文集』*に収録。
1907-08	教育時論	9	心理学上より見たる品性の修養(1)～(7)	
1908	内外教育評論	10	品性修養の心理的基礎	講演。対象は不明。 心理学通俗講話会での講演。 編集者への語り。 青年会館における講演。対象は不明。校閲なし。文責は記者。
1910	心理学通俗講話会 名士禅	11	意志の修養	
		12	禅と精神修養	
1911	実業世界	13	精神修養と注意力	
1912	基督教世界	14	判断と修養	

(注) \*元良勇次郎(1919) 論文集. 弘道館, 東京。

表 2 雑誌『成功』の「修養」欄と雑誌『中学世界』の「修養雑話」欄に掲載された元良の文章

年	雑誌	番号	題目	備考
1903	成功	2	青年と修養	文責は記者。 成民会における演説の大要。文責は本社。 成民会における演説の大要。文責は記者。
		15	常識の養成に就て	
		16	人生の目的と職業	
1906	中学世界	7	如何にして精神を修養すべきか	
		17	如何にして風俗を維持すべきか	
		18	煩悶の価値	
		19	人格の要素	
1907	成功	20	青年と大望心	文責は記者。
1908	成功	21	余の観たる禅学	文責は記者。
1909	成功	22	現代青年は何を目標として進むべきか	文責は記者。
		23	如何にして個性を発揮せしむべきか	文責は記者。

### (1) 1903-06年

元良が修養について語り始めた1903年は、雑誌での修養に関する文章が一気に増えた年である<sup>12)</sup>。この年から3年間の元良の講演や談話は演題によって内容が異なるので、彼の修養についての考えが定まっていないうである。結論や主張は平凡で、例えば「精神修養に就きて」(4, 括弧内の数字は表1, 2の通し番号。以下同じ)は、イギリス人とアメリカ人と日本人の気質を比べ、精神の修養とは偏った人格にしないようにすること、人格が動かないようにすることであると結論し、調和した人格、平均を得た人格をつくるように勉めるのが教育家の目的であると思う、と述べる。

この時期に唯一元良の手で書かれた文章は「精神修養上宗教と科学の関係」(5)であるが、これは1905年に雑誌Monistに掲載されたConflict of religion and science: From a Japanese point of view.の翻訳で、原題中に修養に類する語はない。

### (2) 1907-08年

1907年から翌年にかけて発表されたみつつの文章は内

容が類似している。もっとも長文で詳しいのが「心理学上より見たる品性の修養」(9)で、「品性修養の心理的基礎」(10)はこれを短くした内容になっている。「国民品性の修養について」(8)の冒頭は、この時期の元良の修養論のよい要約になっているので、以下に引用する<sup>13)</sup>。

「人間の品性は先天的なものではなく、経験により練習によって造られ、陶冶されるものである。もし人間の品性は先天的なものだけだと断言する者があれば、自分はその人が誤っていると信じる。そのため、教育的にも、品性の陶冶には常に意志によって練習させるように努めなければならないと思う。それには十分知識を与えて、その品性の陶冶に対する自覚を起こさせて、よく言うツライアル、エンド、エラー〔Trial and error = 翻刻者〕で、失敗し錯誤しても、幾度でも試みて練習させなければならない。」

この時期の元良の修養論は他で論じられた彼自身の心理学や教育学や生物学の理論と関連づけられた。多くの分野の学問と関連づけて論じられたこの時期の修養論は「修養理論」と呼べるだろう。

そのひとつは、遺伝決定論批判である。元良は、遺伝か

環境かの問題に関心があった。1907年の論文「育ちより氏」では元良は氏つまり遺伝を強調し、「教育力によって多くを成し得るという確信」を「大いに注意しなければならない」と語った<sup>14)</sup>。しかし、その後は遺伝決定論に与してはならないと主張した。溝口は、元良の1909年の講演「遺伝と教育」と翌年の論文「遺伝と伝染 児童問題の二方面—氏と育ちの何れかが重きか」に基づいて、元良は遺伝決定論、遺伝中心主義を批判し、遺伝か環境かの問題では環境の一つとして教育を取り上げ、これを重視する態度をもって、とまとめている<sup>15)</sup>。環境ないし教育を重視する態度は先の引用中の、「人間の品性は先天的なものではなく、経験により練習によって造られ、陶冶されるものである。もし人間の品性は先天的なものだけだと断言する者があれば、自分はその人が誤っていると信じる。」に明らかである。遺伝か環境かの問題に関してこの体系化期を境に元良の主張が変わったことから考えると、修養論への取り組みが彼の考えを変えた可能性がある。

もうひとつは循環活動という彼独自の心理学理論である。これは1904年の論文「意思系統に就て」で登場した考えである<sup>16)</sup>。この中で元良は図1を使い、人の中枢に生じた欲が末梢機関を刺激し、それによって行為が生じる、そして欲が満足するまで行為が持続するとした。このように元良は人間の活動を因果関係ではなく、ある種のフィードバック機構と考え、それを循環的な関係とした<sup>17)</sup>。

元良はこの考えを修養論に取り入れ、「心理学上より見たる品性の修養」(9)では図1を簡略化したもの(図2)を使って、人間の身体活動は他の自然現象とふたつの点で違うと説いた。

1点目は、動機が持続することである<sup>18)</sup>。

「例えば、ある一つの動機が起こって中枢が活動して、そして手足が運動するとしても、手足を動かさただけで

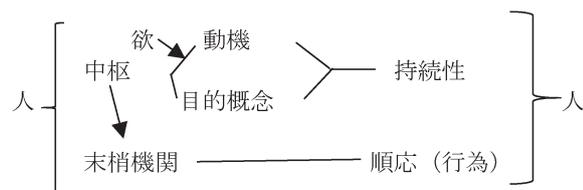


図1 「意思系統に就て」で用いられた図(原図より筆者作成)

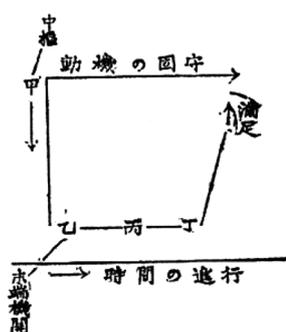


図2 「心理学上より見たる品性の修養」で用いられた図(『論文集』p.494より)

は直ちに動機が消えてしまうわけではない。もしも消えてしまったならば、何のために手足が活動したのか、目的がわからなくなってしまうでしょう。すなわち、手が動いたことは動いたけれども、すでに動機がなくなっているというようでは、その活動が果たして目的に適しているのかが判別できない。そこで、甲は乙を刺激して乙の活動を促すと同時に、甲の中心活動は自分の活動を固守しているのです。」

2点目は、末梢の活動が中枢に戻ることである。「抹消では、乙という機関は丙という機関の活動を喚起し、丙が丁を喚起するというようにだんだん進んで行って、その結果、ついに自己に返ってきて、元の甲という中枢活動が希望している事柄を満足させるのです」<sup>19)</sup>

そして元良は次のようにまとめた<sup>20)</sup>。

「畢竟〔つまり＝翻刻者〕、甲が自分の元の欲望を固守して、乙、丙、丁の機関が活動する結果、ついに甲の希望に合致するわけです(別図を参考)。ここで初めて、いわゆる動機の満足ということが出来る。このように、有機体の活動は循環運動なのだけでも、循環運動といっても渦運動のようにただ環状に循環するものではありません。甲から始まって、甲は自己を固守すると同時に乙を刺激して乙を活動させ、乙から丙、丙から丁へと進んでいき、ついに甲の希望に合致させるというように循環するのが有機活動の特有性で、我われ人類の心的活動の特有性なのです。」

### (3) 1909-12年

1909年から没年の1912年まで、元良は意志、注意力、判断といった心理活動と関連づけて修養を語ったが、その重点は心理活動にあり修養は付け足しの感がある。例えば「判断と修養」(14)では判断には分類判断と批評判断のふたつがあると、前者は標準によって行うのに対し、後者は人格的であるとする。今日の言葉で言えば、批評判断とはセンスが良い悪いというときの「センス」による判断であるようだ。批評判断は「人の活きた判断力」で、「器械とか統計表より少し上にある」<sup>21)</sup>。そしてその判断力を得るのが教育の目的であり、精神修養の主眼である、と元良は付け加える。

## 2. 修養理論

元良の修養理論は1907年から翌年にかけて発表された「心理学上より見たる品性の修養」(9)に詳しい。体系的なこの修養論は「理論」と呼ぶのにふさわしい。本節ではこの文章の元となった講演の背景と、この文章における理論の展開について述べる。

### (1) 背景

この文章の元となったのは1907(明治40)年に開催された師範学校長会での講演である。この会の開催は1900年以來のことで、その間に日露戦争(1904-05)があった。1906年に文部大臣・牧野伸顕と文部次官・澤村政太郎のもとで小学校令が改正され、義務教育期間が4年から6年

に延長された。また師範学校規程も改正された。これらの法令の施行を翌年に控えて、この年の師範学校長会が開かれた。

師範学校長会は5月23日に始まり2日の休会をはさみ6月1日まで続いた。出席した学校長は65名、欠席は3名だった。元良は3日目の5月25日午前9時より「心理学上より見たる品性の修養に就て」と題する2時間の講演（記録では「演説」）を行った。この会議で他に行われた講演は、6日目の片山医博による「飲酒と教育」だけだった。もう一人4日目に小西盲啞学校長の演説が予定されていたが、これは行われず代わりに東京盲啞学校の参観があった<sup>22)</sup>。

この会での元良の講演の背景として興味深いのは、5月27日の牧野文部大臣の訓示である。校長らの注意すべき事項のひとつに次を挙げた<sup>23)</sup>。

「師範学校生徒は卒業後、國民教養の大任ある小學教育の爲めに、其終生の理想を行はんとするものなり、故に自修研鑽をもって社會の進運に先懸けするの氣概あるを要す、而して之を徒らに生徒に向てのみ責むべきに非ず、職員も亦各實踐躬行自修研鑽の模範を示し、自ら感化の功を爲さんことを勤しむべし、(略)國家が教員を優待するの精神明かなれば、生徒は在學の當時より、常に國家の爲めに、一身を教育に捧ぐるの修養を懈るべからず。」

数年前から流行り出した「修養」の語が大臣の公的発言の中に現れた。足りないところを補って大臣が言おうとしたことを解釈すると、以下のように要約できる。

師範学校生徒の修養とは、常に國家の爲めに一身を教育に捧げる人格を形成することである。生徒はそれを怠ってはならず、生徒にとってそれは義務である。師範学校生徒が卒業後小学校教員になったなら、自修研鑽をもって社會の進運に先駆けする氣概をもたねばならない。この自修研鑽とは修養そのものである。しかし師範学校の教職員はこのような人格および修養の實踐を生徒に求めるだけでなく、教職員も各自が修養して生徒に模範を示すべきである。生徒には修養を強いるのではなく、生徒が自ら修養するよう「感化」するのが望ましい。

牧野文部大臣の訓示は元良の講演の2日後に示されたものだった。元良の講演にはこうした修養への理論づけが求められたと思われる。

## (2) 理論の展開

初出の『教育時論』に7回に分けて掲載され、『論文集』では59ページにわたる長文のこの講演記録は19の節に分かれている。「遺伝と教育」「社会的方面から中枢と末梢の關係を論じる」「いわゆる煩悶およびその解決法」「人格分裂とその調和について」といった節からわかるように、講演中の話題は多岐にわたった。ここでは講演の進行に沿って、修養理論の本筋を追ってみる。

### a) 講演の趣旨

まず元良はこの講演の趣旨についてこう述べた。「近頃は世間でも、一般の世人〔世間の人々＝翻刻者〕が教育者並みに品性の修養に注意を払うようになってきたのは誠に

悦ばしいことです<sup>24)</sup>、と言って、特に心理学から見た品性の修養という話をしようと思うのは、「品性などは最も複雑なもので、すべての活動を総合したものであるために、社會や教育など、色々な方面から觀察することができると思われるからです。そもそも、心理学からみても、目的とするところは同じ事柄です。」<sup>25)</sup>と説明する。

続いて元良は問題を提起する。それは、「品性というものが教育できるものなのか<sup>26)</sup>」という問題である。これを元良は、「品性は遺傳的に具わっていて、吾人がこの世に生まれるや否や、吾人の運命はそれによってチャンと定まっているのか<sup>27)</sup>」と言い換える。「運命を変えることができないのであれば、吾人が品性を教育してこれを修養することは、生まれつき得た運命を墮落させないくらいのことにとまり、それ以上に進歩することができないということに<sup>28)</sup>なるから、こうした考えを批評的に研究することが必要だ、と元良は言う。批判すべき遺傳決定論として元良は進化論と東洋思想の一派を挙げる。彼は、後者が誰のどのような説なのかにはふれていないのだが、おそらく『文選』に収められた魏の李康の「運命論」、梁の劉峻の「辨命論<sup>29)</sup>」がそれに当たるだろう。

### b) 主張

元良は、「品性は果たして教育することができるのか、品性は吾人が望んで得ることができるのか<sup>30)</sup>」と問題を再度提起し、望んで得ることができる、と主張する。これは先に挙げた遺傳決定論批判である。ただしここでは進化論などの遺傳決定論にも理解を示した上で、「しかし他方から考えると、品性は各個人、各國民の意志の工合によって大きく変更することができるものではないか<sup>31)</sup>、といった仮説の形での控え目な主張だった。講演の大半はこの主張がどのように可能かを論じるのに費やされる。

### c) 身心の一体と循環活動

この主張の根拠は、「心の活動、特に意志や高等な情緒を練習すれば、それは身体の他の部分にも変化を及ぼすことができ<sup>32)</sup>」ということである。言い換えればこれは教育の効果なので、したがって問題は、「教育がどこまで吾人の品性を変えることができるのか<sup>33)</sup>、ということになる。

元良はこの問題を生物の起源まで遡って考えた。彼は生物の心的活動と生理活動を区別した上で、原始的な動物は両者が一体であるとし、これを陽明学の知行合一と結びつける<sup>34)</sup>。

「少しづつ動物が進化するにしたがって身体にさまざまな機関〔器官＝翻刻者〕が発達しました。(略)吾人々類〔我われ人類＝翻刻者〕に至っては分化も統一も非常に発達して、複雑〔複雑の誤植と考えられる＝翻刻者〕な心的活動の中に統一をみるようになったのです。(略)そういうふうになんか複雑に発達してきたのですが、しかし身体の各部について別々に考えてみると、各機関はやはり元始的(原始的、引用者)な動物と同じで、生理的活動と同時に無意識感情のようなある種の心的活動をしている。すなわち、心と動とが合一なのです。」  
続いて元良は、中枢の活動と末梢機関の活動の区別が生

物の発達とともに起きて、それが「人類において極度に達している」<sup>35)</sup>と述べる。そして図2を使って、先に挙げた循環活動を説明する。これを元良は「我われ人類の心的活動の特有性」<sup>36)</sup>と言う。

#### d) 試行錯誤と意志

ここで元良は進化論を持ち出す。彼によるとこのような有機体の活動は初めから完全にできているのではなく、動物が多くを経験を経て、適者が残っていった次第に完成したことになる。先の「我われ人類の心的活動の特有性」という表現は、人類が最も進化した動物であるとの考えから来たのであろう。

循環活動を元良は玉突きと雛の例えで説明する<sup>37)</sup>。

「今ここに玉突き台の上の一つの玉があって、その玉を突こうと試みます。一度突いて、もしもそれがちょうど自分の中でよいと思うところに中れば〔当てようと思うところに当てれば＝翻刻者〕、それでそのことを終えたこととなります。あるいは卵が破れて雛が出る。雛は一種の本能をもっているから、出るとすぐにその辺にあるものを啄こうとする。これらの場合に、一度でも成功すればそれでよいのです。けれども一度で成功しなかったときは、そこで止めてしまうか、もしくは再び試みることになる。」

その時に図2の中枢の甲の動機が持続すれば、末梢機関は2度3度と活動を繰り返す。有機体が目的を達するまで何度も試みることを元良は、生物学者の言葉を借りて「試行と錯誤の方法 (The method of trial and error)」<sup>38)</sup>と呼んだ。元良によると、経験と練習によって動機と末梢機関の作用との連絡ができる。そして元良は、この試行と錯誤の方法は「生物進化の一大原因」<sup>39)</sup>である、と言う。

現代の心理学および生物学の一般的な知識では、進化が生物の集団レベルの現象であるのに対して、試行錯誤は個体レベルの学習における現象である。元良のように試行錯誤を生物進化の要因とするのは、個体レベルの現象を集団レベルに持ち込んでいることになり、筆者には無理のある議論のように思える。

元良は続いて意志活動を説明する。彼によれば、これには目的観念、動機、批評判断のみつつがある。目的観念は知的作用であるのに対し、動機は「末梢機関を刺激し、その活動を促すのに最も必要なものです」<sup>40)</sup>。批評判断は末梢機関の活動の結果を判断する作用のことで、これを元良は習字を例にして説明する<sup>41)</sup>。

「例えば、いま私が習字をしようと思うと向こうに手本があるので、手本のとおりに書いてみようと思います。それで、手の運動が紙面の字に表れて、それが眼に映り、最後に中枢に伝わるのです。ところが、どうも手本のとおりにはいない。それで、また試みる。」

元良によると、この手本と比較してもう一度試みようとする考えを起こすのが批評判断である。

#### e) 品性とは何か

ここまで説明し終えたところで、講演の半ばに来て元良はようやく品性とは何なのか説明する<sup>42)</sup>。

「品性とは、いずれにしても中枢に属する作用でしょう

が、その起源について言えば、生物の過去の経験が次第に重積して遺伝したもので、生物の活動の核をなしています。そのために、それは一種の本能で、求生の本能とか、求知の本能とか、遊戯の本能といったように一部の活動に対するものでなく、これら諸種の本能を取捨選択する中枢的本能なのです。」

元良によれば、品性は中枢にあって活動し、複数の目的観念からひとつを取捨選択して確定する作用をする。批評判断の際にも現れる。また品性は、理屈以外の理由から物事に対する好き嫌いを判断させる、各個人の趣味性のことでもある。「つまり、品性とは各個人のためにその人を定めるその人の気質なのです」<sup>43)</sup>

元良が考える品性は遺伝性のものである。その作用は目的を絞ることと、末梢機関の活動の結果を判断することである。それは個人の個性を創るので、趣味性、気質でもある、というように品性は多様な現れ方をする。

#### f) 品性修養の方法

元良によると品性は遺伝性のものだが、だからと言って品性を変えることはできない、とまでは彼は考えない。ここで試行錯誤の方法が活用される。「品性練習の方法としては動物進化において自然に発達してきた方法、すなわち試行と錯誤の方法がよいでしょう」<sup>44)</sup>

そして参禅を勧める。参禅は動物進化の方法に類似しているからである<sup>45)</sup>。

「禅宗などで修行する仕方も有益だと思えます。つまり、参禅者に対して彼らの思うことをさせて、失敗の上に失敗を重ね、ついに自ら自覚させる方法です。しかも、その方法は我々が今日まで数千年、もしくは数万年かかって発達してきた動物進化の方法に類似しているのです。」ただし参禅は少し難しすぎるからすべての人に当てはめることはできない、と元良は言い、学生のための試行錯誤の方法に類似した方法についての考えを述べる。それは、以下のように学生の自治に任せることだった<sup>46)</sup>。

「例えば、自治に任じるようなこと、すなわち人をなるべく外から制しないで各自の意志に任せてことをさせるようなことは、各人に対して自己の責任を自覚させますから試行と錯誤の方法に類しています。つまり、遠方からこれを観察して監督すると同時に、青年に対してはなるべく自治に任じて、自己の失敗によって自ら学ばせることが最も良い方法であろうと思えます。」

#### g) 結論

このように思索して元良は以下のように結論する<sup>47)</sup>。

「元来、生まれながら品性の種子くらいはあるにしても、完成しているものではない。それは、意志の活動による試行と錯誤の方法によって奮闘し、少しずつ修養することができるものです。言葉を換えれば、吾人が努力して獲得できるものであります。」

はじめは仮説の形だった品性は変えることができるとの主張が、こうして最後に断言された。

最後に元良は、日本が世界から影響を受けていることにふれ、世界からの悪い感化を防ぐために、「品性の修養が国民教育の上で重要な問題だと思えます」<sup>48)</sup>と述べて講

演が終わる。

### 3. 考 察

#### (1) 元良の修養論の特徴

元良の修養論の特徴を、当時の代表的な修養論で広く読まれた新渡戸稲造の『修養』と比較することでまとめてみよう。それは、平易な文章がある一方で、非常に理論的な文章もあることである。これは、「僕は其ういふ学理上の根本思想に立ち入る力もなく、又聊（いささ）か立ち入り得るとするも、態（わざ）と之を避けたい積（つもり）である。」<sup>49)</sup>と、一貫して平易に書き、理屈を避けた新渡戸と対照的である。元良は新渡戸が避けた、「学理上の根本思想」に挑戦したと言えるだろう。元良の理論的な修養論が展開された「心理学上より見たる品性の修養」(9)は文部省から師範学校生徒と教職員の修養のための理論づけのために求められた講演だったが、元良は品性の修養の心理学的、生物学的根拠に集中していた。

元良が理論的に修養を論じた理由として、彼が修養論を説いた相手である聴衆や読者の社会階層を指摘することができる<sup>50)</sup>。新渡戸は『修養』を執筆した際に次のようなことを心がけたと言う<sup>51)</sup>。

「初から可成通俗を旨とし、車挽く人、柴刈る野の人にも、尚解し得る程度に話したいと思直しては、込入ったことを省き、専ら平易を主とし、浅く平たく綴ったのである。」

これとは対照的に、元良の文章の読者や講演の聴衆は、「車挽く人、柴刈る野の人」よりも上の階層に属する人たちが多かった。例えば「精神修養に就きて」(4)の聴衆は師範学校生徒で、「心理学上より見たる品性の修養」(9)の聴衆は師範学校長の校長だった。「西洋の思想と精神修養との関係」(5)の聴衆は禅宗の僧侶と関係者だった。「判断と修養」(14)がどのような聴衆を相手にしたのか詳しい情報がないが、掲載誌から判断するとキリスト教関係者だった可能性が高い。「科学と修養」(3)の聴衆は知識人で、「意志の修養」(11)は一般人を対象とした講演であるが、聴衆は心理学に関心のある知識人に準ずる人たちと考えていだろう。

田嶋は戦前の日本の青年を社会史の視点から三層に分けた<sup>52)</sup>。第一層は共同体の解体の中から現れ、中等、高等教育機関に在籍し、やがて新中間層の上層部を形成することになる者たち、第二層は青年でありたいと願い、青年期を求めて共同体から都市社会への脱出を試みる者たち、第三層は共同体の内部に閉じ込められる者たちである。この分類に従うなら、師範学校生徒に語った講演「精神修養に就きて」や雑誌『中学世界』に掲載された文章の読者は第一層の青年たちである。また、社会の中での成功を求める青年を読者に想定した雑誌『成功』に掲載された談話の読者は第二層の青年たちである。これに加えて元良の読者や聴衆には教育者や宗教者や知識人も含まれていた。このような人々は、田嶋の分類の第一層の青年たちの指導者層である。元良は雑誌記者に求められて第二層の青年に向けて修養を語ることがあったが、力を入れて語り、文章を書いた

のは、主に学生たちと彼らの指導者たちに向けてだった。

#### (2) 教員の修養に示唆するもの

元良の修養理論は教員の修養にどのような示唆を与えるだろうか。雑誌『日本之小學教師』に掲載された記事を手がかりにして明治30年代の教師の修養論を調べた大西によると、当時の教師の修養の意味は感化力を身につけることであった<sup>53)</sup>。教師の修養についてのこの考えは、先に引用した師範学校長会での文部大臣の訓示と共通している。したがって明治40年頃には教員が修養をするのは児童生徒への感化力を身につけるためという共通理解があった。

しかし元良は修養を語るときに感化について触れることがなかったし、教師の修養について語ることもなかった。彼の考える修養は個人の中に閉じていて、修養の結果向上した人格が他の人格に影響を与えるかどうかには彼は関心なかった。またその向上した人格がどのようなものかにも関心がなく、文部大臣が語った常に国家のために一身を教育に捧げる人格の形成にふれることがなかった。1907年から翌年の文章に顕著だが、元良の修養論は修養の実用性よりも、修養が成り立つための心理学的・生理学的根拠を解明する一般理論を作ることに向けられていた。つまり彼の問題意識は、修養とは何か、修養をすることはなぜ必要かではなく、修養はいかにして可能か、だった。

したがって彼の修養理論が教育の場に持ち込まれるなら、教員と児童生徒の両者に修養のメカニズムを説明するものになるだろう。つまり人間は動機を持ち、動機を失うまで活動を続ける、そしてその結果、身体と人格を変えることができるのである。

### 4. 今後の課題

元良の主張は当時の心理学・生理学に基づいていたが、あくまでの理論上の主張であり、物質的な基盤を欠いていた。彼は品性を遺伝性のもとしながらも意志による練習で変えることができると主張した。しかし、人間は意志の力で自身の遺伝子を変化させることや遺伝子の発現を制御することができるのだろうか。

現在、エピジェネティクスが心理学で注目されている。エピジェネティクスとは、DNAの塩基配列の変化を伴わずに、染色体における変化によって生じる、安定的に受け継がれうる表現型と定義される生命現象である<sup>54)</sup>。この一連の研究によると、ヒストン修飾とDNAのメチル化によって遺伝子発現が制御される。これまでに生活習慣病、悪性腫瘍、精神神経疾患などにエピジェネティクスが関係していることが報告されているように、そのネガティブな側面が注目されてきたが、野村は発達心理学の立場から、例えばマインドフルネス瞑想による効果のエピゲノム機構への影響のようなポジティブな側面に着目してゆくことを期待している<sup>55)</sup>。エピジェネティクスの考えは遺伝も環境も含めた生物の生長・発達を理解するために重要であると思われる。もし人格の肯定的な変化との関係を捉えることができるなら、修養が生物学的に裏付けられることになる。練習や習慣、試行錯誤が、人間にとってポジティブな

作用をするように遺伝子の発現に影響を与えることが今後示されるなら、元良の修養論は現代においてこそ科学的な根拠を得ることになるだろう。

## 注

- 1) 王成 (2004) 近代日本における〈修養〉概念の成立. 日本研究 29, pp.117-145.
- 2) 新渡戸稲造 (1970) 新渡戸稲造全集第七巻. 教文館, 東京, p.23.
- 3) 三省堂 (1989) 大辞林. 三省堂, 東京, p.1139.
- 4) サトウタツヤ, 鈴木朋子, 荒川歩編 (2012) 心理学史. 学文社, 東京.
- 5) 佐藤達哉 (2002) 日本における心理学の受容と展開. 北大路書房, 京都.
- 6) 5) の第 5 章, および鈴木聡志 (2017) 明治の教育問題と元良勇次郎『元良勇次郎著作集』刊行委員会 (編) 元良勇次郎著作集別巻 2. クレス出版, 東京, pp.93-114.
- 7) 伊藤敏子 (2015) 新渡戸稲造における修養論の位相—包摂と排除の視点から. 三重大学教育学部研究紀要 66, pp.325-341; 森上 (青柳) 優子 (2010) 新渡戸稲造と修養—西洋体験を手がかりとして. 比較日本学教育センター研究年報 6, pp.171-177; 森上優子 (2015) 新渡戸稲造の社会教育—雑誌『実業之日本』の修養言説を手がかりとして. 比較日本学教育研究センター研究年報 11, pp.265-273; 網澤満昭 (2007) 新渡戸稲造と修養. 文学・芸術・文科 19 (1), pp.1-14; 王成 (2018) 新渡戸稲造と近代日本の〈修養〉. 岩手大学人文社会科学部紀要 102, pp.175-183.
- 8) 中内敏夫, 上野浩道 (1977) 解説. 成城学園澤柳政太郎全集刊行会 (編) 澤柳政太郎全集第 2 巻修養と教育, pp.501-525; 齋藤智哉 (2011) 澤柳政太郎の「學修」における「修養」. 國學院雑誌 112 (7), pp.1-11.
- 9) 佐藤拓司 (2017) 加藤咄堂の「修養」論—明治・大正・昭和初期における一教化運動家の生涯と思想. 青山学院大学教育学会紀要「教育研究」61, pp.55-67.
- 10) 田邊尚樹 (2018) 大正期公民教育における青年と修養—天野藤男の公民教育論を中心に. 基礎教育学研究室研究紀要 44, pp.117-127.
- 11) 筆者はかつて「修養」の語が含まれる元良の文章を 12 としたことがあるが, それは資料を『元良勇次郎著作集』に限定したためである. 6) の鈴木 (2017).
- 12) 1) に同じ.
- 13) 元良勇次郎「国民品性の修養について」『元良勇次郎著作集』刊行委員会 (編) (2015) 元良勇次郎著作集第 12 巻. クレス出版, 東京, p.231.
- 14) 元良勇次郎 (1907) 育ちより氏. 東洋哲学, 15 (7), pp.55-56.
- 15) 溝口 元 (2017) 19 世紀科学思潮と元良勇次郎—心的エネルギー, 心元の背景. 元良勇次郎著作集別巻 2. クレス出版, 東京, pp.161-185.
- 16) 元良勇次郎 (1904) 意思系統に就て. 兵庫県教育会報, 180, pp.20-32.
- 17) 5) に同じ.
- 18) 元良勇次郎「心理学から見た品性の修養」『元良勇次郎著作集』刊行委員会 (編) (2016) 元良勇次郎著作集第 13 巻. クレス出版, 東京, pp.311-312.
- 19) 18) の p.312.
- 20) 18) の p.312.
- 21) 元良勇次郎 (1912) 判断と修養. 基督教世界 1408 号, p.3.
- 22) 師範学校長會 (上). 教育時論 797 号, 明治 40 年 6 月 5 日.
- 23) 牧野文相の訓示. 教育時論 797 号, 明治 40 年 6 月 5 日.
- 24) 18) の p.303.
- 25) 18) の p.303.
- 26) 18) の p.304.
- 27) 18) の p.304.
- 28) 18) の pp.304-305.
- 29) 棟尾政敏 (2013) 「運命」哲学・思想翻訳語事典. 論創社, 東京, pp.19-20.
- 30) 18) の p.306.
- 31) 18) の pp.306-307.
- 32) 18) の p.307.
- 33) 18) の p.307.
- 34) 18) の pp.308-309.
- 35) 18) の p.311.
- 36) 18) の pp.312-313.
- 37) 18) の p.313.
- 38) 18) の pp.313-314.
- 39) 18) の p.314.
- 40) 18) の p.315.
- 41) 18) の p.315.
- 42) 18) の p.316.
- 43) 18) の p.316.
- 44) 18) の p.325.
- 45) 18) の p.325.
- 46) 18) の p.325.
- 47) 18) の p.329.
- 48) 18) の p.333.
- 49) 2) の p.24.
- 50) 修養論と社会階層を関連付けて理解する発想は大西 (2017) による. 大西圭介 (2017) 修養論の系譜に関する考察—明治以降の修養論者の階層に注目して—. 筑波大学教育学部教育行政学研究室紀要, pp.26-37.
- 51) 2) の p.8.
- 52) 田嶋 一 (2016) 〈少年〉と〈青年〉の近代日本—人間形成と教育の社会史. 東京大学出版会, 東京.
- 53) 大西圭介 (2018) 明治 30 年代における教師の修養—雑誌『日本之小学教師』を手がかりに—. 筑波大学教育学系論集 43 (1), pp.41-53.
- 54) 仲野徹 (2017) エビジェネティクス入門—基礎から精神神経疾患との関連まで. 児童心理学の進歩 2017 年版 56 巻, 金子書房, 東京, pp.235-253.
- 55) 野村理朗 (2017) 新しい人間観の確立に向けて—発達研究にエビジェネティクスの視点をどう生かすか. 児童心理学の進歩 2017 年版 56 巻, 金子書房, 東京, pp.234-258.

---

# Yuzero Motora's Opinions on *Shuyo* (Cultivation) : Their Characteristics and Suggestions for Teacher's Cultivation

By

Satoshi SUZUKI\*†

(Received July 9, 2019/Accepted March 10, 2020)

**Summary** : Teachers are obligated to engage in continuous study and *shuyo* (cultivation) by law in Japan, but what is teacher's cultivation? We examined Meiji era psychologist Yuzero Motora's opinions on cultivation and their characteristics, and his suggestions for teacher's cultivation. Motora published 23 articles on cultivation from 1903 to 12 (year of his death). He constructed a systematic theory on cultivation based on psychology and biology in 1907-08 and argued that human beings can cultivate their own characters by trial and error which is informed by the activity of will. His articles tended to be very theoretical. His theory explained how cultivation can occur so the mechanism of cultivation can be explained to teachers and students. Nowadays, epigenetics can give a well-grounded reason to his theory.

**Key words** : Yuzero Motora, *shuyo* (cultivation), teacher's cultivation, history of psychology, epigenetics

---

\* Teacher-training Course, Tokyo University of Agriculture

† Corresponding author (E-mail : suzukis@nodai.ac.jp)